

## 教育研究グループ「研究結果」報告書

報告日 平成31年4月26日

グループ名	聴覚障害幼児教育研究会	フリガナ 代表者氏名	スガワラ ミツノリ 菅原 充範
学校名 (代表者)	東京都立大塚ろう学校城東分教室	電話番号	03-3685-9100
研究テーマ	聴覚障害幼児の社会性の向上に向けた実践事例の検討 —エピソード記録による検討を中心に—		
研究期間	平成30年4月1日 から 平成31年3月31日 まで		
研究結果 の概要	<p><b>I 問題の所在と目的</b></p> <p>社会性は、他者との関係構築の基盤になる協調性に加え、目標達成に向けた忍耐力や探求心等を含めた幅広い概念として捉えられる。新幼稚園教育要領では（文部科学省、2018）、「学びに向かう力、人間性等」として重視される。</p> <p>我が国の聴覚障害幼児の社会性については、中野（1972）による性格特性調査において、「顕示性」「自制力欠如」「依存性」「攻撃性」に課題を示す児が20%～30%いることが報告されている。このような社会性の問題については、生下時からの聴覚障害による聴覚・言語的な制約を背景とした、コミュニケーションの不十分さや、友人関係の狭さ、社会的経験の不足等、環境要因の影響が指摘される（澤，1999）。円滑で活発なコミュニケーション関係の形成に向けて、近年では、多くの特別支援学校（聴覚障害）で併用法（聴覚口話法と手話等、視覚的手段の併用）による教育が行われている（我妻，2008）。しかし、併用法による円滑なコミュニケーション関係形成と社会性との関連性については不明な点が多く、家庭環境や補聴手段等、様々な環境要因を含めた検討が求められる（都築，2007）。</p> <p>また、Calderon,R.&amp;Greenberg,M.（2015）では、これまでの海外の研究を概観し、社会性の向上には、コミュニケーション面の充実に加え、社会性に着目した教育プログラムの重要性を指摘する。聴覚障害幼児の社会性の向上には、円滑で確実なコミュニケーションの中で、他者と心を通わせながら、その年齢に応じた社会的経験を積み重ねていけるような環境構成等、指導の工夫が重要だといえる。</p> <p>そこで、本研究では、聴覚障害幼児が幼稚園生活の中で起こる多様な体験の中で、どのように社会性の育ちにつながる経験をしているか、保育記録をもとに事例的に検討することを目的とした。併せて、質問紙による発達評価を用いて、聴覚障害幼児の社会性の発達状況を検討した。</p> <p><b>II 対象及び方法</b></p> <p>A 特別支援学校（聴覚障害）幼稚園部に在籍する年中児から年長児の聴覚障害幼児13名のうち、研究前後で発達評価が可能であった12名（研究開始時平均月齢51.5ヵ月、良聴耳の平均聴力レベル71.7 dB）を対象とした。</p> <p>実践事例は、対象幼児の担当教師が、社会性の向上につながったと考えられる任意事例をエピソード記録としてまとめ、本研究会で協議した。各事例については、西坂・岩立・松井（2017）によって示された、幼児期に重要と考えられる社会情動的スキル11項目（自発性、意欲、集中、興味、協調性、素直さ、共感、折り合い、自己主張、自己抑制、生活力）を参考に、社会性の育ちを検討した。</p> <p>また、発達評価には、KIDS 乳幼児発達スケール（1991）9領域のうち、社会性に関</p>		

連すると考えられる3領域（①対子ども社会性：25項目、②対成人社会性：37項目、③しつけ：25項目）計87項目を用いて発達月齢を算出した。t検定を用いて統計的に検討した（ $p<.05$ ）。

### III 結果

#### 1 事例検討

表1に検討した全8事例について、学年及び関連する社会性項目を示した。事例から、特に育ったと考えられる社会性項目を○で表記した。○の項目は、事例提供者の意図あるいは協議の中での注目を反映しているとも解釈できる。事例検討により、協調性及び、活動への取組に関わる4項目（自発性、意欲、集中、興味）は年中段階から注目され、他者意識に関する内容（共感、折り合い）及び自己抑制は年長段階で特に注目された。協調性については、全事例をとおして、その育ちが注目された。

ここでは、紙面の都合により、各学年での事例を1例ずつ報告する。

表1 実践事例一覧

事例	学年	社会性										合計	
		自発性	意欲	集中	興味	協調性	素直さ	共感	折り合い	自己主張	自己抑制		生活力
折り紙	年中	○	○	○	○	○							5
色水遊び	年中	○	○	○		○				○			5
言葉遊び	年中		○	○	○	○				○			5
運動会の絵	年中		○	○		○							3
リズム運動	年長				○	○		○					3
どんぐり拾い	年長	○	○	○	○	○			○	○	○		8
話し合い	年長					○	○	○	○	○	○		6
なぞなぞ	年長	○	○		○	○					○		5
合計		4	6	5	5	8	1	2	2	4	3	0	40

#### (1) 年中児事例「色水遊び（7月）」

①**実践の背景**：年中児 B・C 児は、水に草花をすり潰したり、砂を混ぜて色水を作ったりして遊んでいた。作った色水をコーヒーやお茶に見立ててお店屋さんを開くようになった。連日取り組む中で、A 児は色水を「りんごジュース」「ぶどうジュース」に見立てるようになったが、庭の草花や砂だけでは出来上がる色が限られてしまい、他児とイメージを共有できない場面が見られた。幼児同士でイメージを共有する楽しさを感じてほしいと考え、色水作りを導入した。

#### ②**実践の経過**：幼児でも扱いやすい

素材として、水性フェルトペンとコート紙、ペットボトルを使った色水作りを設定活動の中で行った。導入あたっては、不思議さや



意外性を演出するため、手品の要領で色水作りの手順を実演した。A 児は、例示した色水を見て、すぐに「ぶどうジュースみたい」と発言し、普段の遊びに取り入れることを想像したようだった。B 児は、ペンで塗った部分が水に溶ける様子に関心をもち、じっくりと観察しながら色水作りに取り組んでいた。C 児は3つ目の色水作りで、コート紙を様々なペンで塗り分け、水の中で色が混ざることを見つけた。D 児は、色を塗った紙片を一つのペットボトルに何枚も入れて、より色が濃くなることに気付いた。これらの発見を友達同士で共有できるとよいと考え、C 児やD 児の様子への注目を促したが、それぞれ自分で作ることに夢中で、他児への注目は難しかった。気付いたことを教え合う場面につなげるには意図的な介入が必要であった。

色水遊びは、ジュースへの見立てが容易だったこともあり、ジュース屋さんごっことしてその後も連日続いた。コート紙がなくなってしまった時には、他の紙を使うように促し、E児F児G児らは、トイレトペーパーが水に溶けやすく、より濃い色水が作れることを発見した。

- ③実践から考えられたこと：幼児らの興味をもとに活動を設定したことで、集中し試行錯誤に取り組む姿が見られた。試行錯誤の中で、濃さの変化や混色などの科学的な事象への気づきがたくさん見られたが、気づきを友達同士で共有するには、教師が意図的に場面を設定する必要がある。まずは、一人一人の気づきを教師が個別に受けとめ、発見の喜びを他者と分かち合う経験を大切にする必要があると思われる。このような経験の積み重ねが、友達同士での学び合いの土台になると考えた。

## (2) 年長児事例「どんぐり拾い (9月)」

- ①実践の背景：交流活動のため、年中、年長児と一緒に近所の保育園に行った帰り道、大きなマテバシイの木の下に、どんぐりがたくさん落ちていることを見つけた。ちょうど、運動会練習に取り組んでいた頃だったため、紅白に分かれて、制限時間内にどちらが多く拾えるか、どんぐり拾い競争を行った。どちらも袋いっぱいに拾ったどんぐり。見た目だけでは分からず、学校に戻ってから、はかりで重さを調べた。どちらも同じぐらいの重さだった。

- ②実践の経過：この結果に年長児は納得せず、学級での話し合い活動のもと、自分たちの手で数え上げることになった。数の理解には個人差が大きいため、同じ大きさの模造紙の罫線にそって並べていくことを幼児らに提案した。紅白3人ずつに分かれて、数百のどんぐりを並べることは根気のいる作業であった。幼児らは、途中から並べる役と休憩する役とで分かれるようになり、交代しながらどちらも最後まで数え上げることができた。一つ一つどんぐりを並べていくこと20分。結果は、295個対282個で赤組の勝ちだった。もともとは、どちらが多いか決着をつけるために始まったことではあったが、どちらが勝利したかというよりも、最後まで数え上げたことへの達成感の方が大きいようであった。数えた結果は、年中児にも分かるように結果を添えて、廊下に掲示した。



- ③実践から考えられたこと：「重さが等しい」ことが「個数も等しい」ことにはならないということへの理解がどこまであったかは分からないが、自分たちの力で確かめたいという気持ちの育ちに驚いた。実際にどんぐりを一つずつ並べていく作業では、集中への個人差が大きかったものの、数える役と休憩する役に分かれることで危機を乗り越え、最後までやり遂げることにつながった。本事例では、時間的な制限があったことと、学年全体で目的を共有している間に、思いを実現させてあげたいという考えから、教師側で数える方法を提示した。社会性の育ちに向けては、どのように数えるとよいか、方法についても幼児らとともに考えて試していくことが有効だと考えられた。

## 2 社会性評価

図1に、KIDS 乳幼児発達スケール3領域（対子ども社会性、対成人社会性、しつけ）の結果を示した。3領域の平均発達月齢は、「対子ども社会性」で  $48.7 \pm 7.6$  カ月から  $59.8 \pm 2.63$  カ月へ、「対成人社会性」で  $49.8 \pm 8.6$  カ月から  $68.5 \pm 13.9$  カ月へ、「しつけ」で  $56.5 \pm 10.1$  カ月から  $65.7 \pm 10.7$  カ月へと有意に上昇した ( $p < .01$ )。

また、3領域の平均発達月齢は、2018年度調査で概ね平均生活月齢と概ね近い値を示したが、「対成人社会性」及び「しつけ」の2領域では標準偏差が13.9カ月、10.1カ月と大きく、発達の個人差を示した。

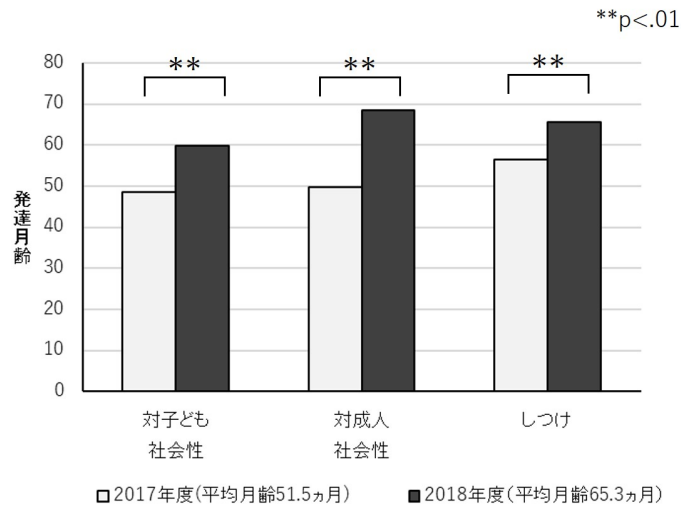


図1 社会性の発達評価(N=12)

## IV 考察

### 1 社会性の向上に向けた指導について

本研究では、年中児及び年長児を対象とした幼児期後期の任意事例8例をもとに、社会性の育ちに注目して省察した。社会性11項目のうち、協調性及び自発性や意欲等の態度・心理面が年中段階から注目されていたのに対し、他者意識に関わる共感や折り合い、自己抑制については年長段階で注目されていた。

特に、協調性が全事例で注目されていたのは、コミュニケーション関係形成に向けた指導という特別支援学校（聴覚障害）の専門性が反映されたものと思われる。加えて、設定活動であっても、幼児に「やらせる」のではなく、自分から「やる」「やろうとする」意欲やそのための指導上の工夫がどの事例でも重視されていた。幼児期における、幼児の活動への意欲や主体性を大切にするといった基本姿勢を再認識できた。

また、集団生活においては、一人一人の思いや考えが十分に尊重されながらも、他者への思いや考えに目を向けたり、譲り合ったりするような関係の形成が必要である。そのための教師の指導としては、年中段階で一人一人の思いや考えを十分に認めながら、友達同士で分かち合えるような場面を意図的に設定すること、年長段階では、幼児同士で考えを出し合い、折り合いがつけられるように見守っていくことの重要性が、本事例から示唆された。

さらに、指導記録を振り返る過程は、指導の実際を学び合うだけでなく、その時、その場では気付かなかった幼児の姿に気付くことになり、より深い幼児理解につながると考えられた。なお、本研究では、発達評価のために、本研究では対象を幼児期後期に限定したが、さらに対象を広げて事例を省察し、幼稚園入学初期から年長段階の終わりまでの社会性の育ちの理解を深めていきたい。

## 2 社会性の発達について

本研究では、KIDS 乳幼児発達スケールを用いた社会性の評価により、3領域ともに有意に発達月齢が向上したことを示した。

事例検討では、経験の一端を省察したに過ぎないが、1つの事例においても、幼児は社会性に関わる幅広い内容を経験していることが読み取れた。幼児の社会性は、日々の様々な経験の積み重ねの中で、少しずつ形成されていくものだと捉えることができる。だからこそ教師は、活動の中で、どのような経験をしてほしいと考えるのか、活動のねらい（願い）を明確にもち、指導にあたる必要があるといえる。

一方で、個人差に注目すると、生活月齢に比して社会性の発達状況に課題を示す幼児がいることも分かった。一人一人の発達状況に応じて指導のねらいを立てていくことは重要だが、その年齢段階で経験することが望ましい、社会性に関わる内容を考慮したねらいの設定も必要であろう。例えば、年長段階では、就学後の学校生活への円滑な移行に向けて、適切に自己主張しながら、他者への思いや考えに目を向け、必要に応じて折り合いをつけたり、自己抑制したりするなど、他者とのよりよい関係性の形成に向けた指導が求められる。今後は、個人差に注目して、社会性の育ちの形成過程とそれを支える指導の工夫について検討していきたい。

## 3 今後の展開

本研究は、実践事例集作成に向けた取り組みの一環として行った。今後さらに実践事例を収集し、社会性形成の発達過程を保育の具体的な活動場面をもとに検討するとともに、社会性向上に向けた指導の実際を明らかにしていきたい。実践事例集としてまとめ、教師間で共有することは、経験の浅い教師にとっての参考資料になり、専門性の向上に有用だと考える。取り組みは緒についたばかりであるが、引き続き研究を進め、指導の改善に努めていきたい。

## V 文献

- 我妻敏博（2008）聾学校における手話の使用状況に関する研究（3）. ろう教育科学, 50（2）, 77-91.
- Calderon,R.&Greenberg,M.(2015)第13章 ろう児の社会性と情緒の発達. 四日市章・鄭仁豪・澤隆史（訳・編）デフ・スタディーズ ろう者の研究・言語・教育. 321-341.
- 三宅和夫（1991）KIDS 乳幼児発達スケール.発達科学研究教育センター.
- 文部科学省（2018）特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編（幼稚園・小学部・中学部）.開隆堂.
- 中野善達（1972）聴覚障害幼児の性格特性. ろう教育科学, 14（3）, 119-133.
- 西坂小百合・岩立京子・松井智子（2017）幼児の非認知能力と認知能力、家庭でのかわりの関係. 共立女子大学家政学部紀要, 63, 135-142.
- 澤隆史（1999）第6章 社会性の発達. 中野善達・吉野公喜（編）聴覚障害の心理. 99-114. 田研出版.
- 都築繁幸（2007）聴覚障害幼児の情緒・社会性に関する一考察. 愛知教育大学研究報告, 56（教育科学編）, 19-25.

### その他 特記事項

実践事例の収集及び分析にあたっては、各校の倫理規定に基づき、個人情報が特定されないように配慮している。

なお、本研究について、特記すべき利益相反はない。